

ISSN 0910-2396

# 野鳥 —北海道— だり

第 79 号

編集・発行 北海道野鳥愛護会

発行年月日 平成 2 年 3 月 21 日

オオハム 小樽港 1. 12. 3



撮影者 志田博明

# 私の探鳥地 (14)

## 厚沢部町土橋自然教育林 林 吉彦

国道227号線を函館から車で約1時間半、厚沢部川にかかる俄虫橋を渡ると右前方が大きく開ける。すぐに「つちはし自然教育林」の案内塔、ヒバ（ヒノキアスナロ）の丸太造りのシンボルタワーが左手に見えてくる。そこで国道を離れ、左に入ると総ヒバ造りの森林展示館前が出る。駐車場の奥には、やはり総ヒバの洒落た公衆トイレがある。森に入る前にちょっと立ち寄って……。ここにはバンガローもあるので寝袋を持っていけば、真夜中の、夜明け前の森と鳥たちに触れることもできる。この教育林は113haであるが、周りの森を含めて400haが鳥獣保護区になっており、1年を通じて多くの野鳥に会う事ができる。教育林の中には、いくつものルートが案内板つきで整備されているので安心して森に入ることができる。

この森の主人公は、クマガラである。トドマツの南限といわれる森の中では老木に多くの食痕を見ることができる。また、ヒバ林の中は日照量が少なく、笹も非常に薄いので見通しが良いので、林床を歩くクマガラに会えるかも知れない。

春から夏にかけての主役は、土地の人か南蛮鳥とよんでいるアカショウビンである。森の樹々が暗闇の中からシルエットを浮かび上がらせると森のあちこちから声が響いてくる。とくに、エゾヤマザクラやカスミザクラの多い沼地周辺が発信地として目立つ。この近くではオオルリもよく目にする。ただ、森全体は針葉樹が多く、広葉樹も樹高が高いため、センダイムシクイやイカル・カラ類の声を聞く割には、ゆっくり姿を観察しにくいかも知れない。それでも、ヒナを連れたエゾライチョウが目の前を横切ったとすると、思わず歓声をあげたくなる。

沢沿いには、トチノキ・サワグルミが多くヤブサメの絶好のすみかになっており、アオジの姿やコルリの声もする。とにかく、ここは樹齢350年を越えるブナ・ヒバも多く、原生林としての自然度を今なお保っておりアオハダなど鳥の大好きな実をつける樹も沢山あるので鳥種も豊かである。

木の葉の落ちる秋か冬にかけては、カラ類の混群、シマエナガ、キクイタダキが目につく。クマガラ・アカゲラ・ヤマゲラ・コゲラもゆっくり姿を見せてくれる。

森林展示館の手前に松山営林署厚沢部担当区事務所が。その主任の高橋氏は、森林学に造詣が深く、野鳥にも

熱い想いを寄せているので、担当区に寄って、探鳥コースや植物について予備知識を仕入れていくと、楽しさも倍加するはずである。（雪の季節はかんじきもたのめば貸してもらえるはず）

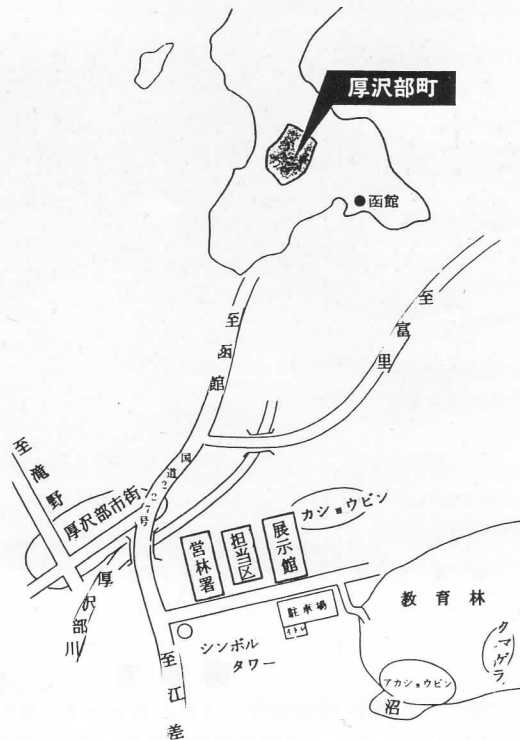
時間があるなら教育林を出て滝野部落や富里部落方面に足を延して見ると良い。どちらも水田地帯だが、田植え時期ならアマサギ・ダイサギ・コサギを見ることが出来る。また厚沢部は渡り鳥の日本海側ルートになっていると思われ、雪解けのころから鳥の数が増え、ツグミ・カシラダカ・ホオジロの群れに会う事ができる。とくに富里地区には、水田近くの雑木林全体がカシラダカ・ホオジロの声に揺れる様である。秋には、ノゴマ・ノスリも大量に通過する。

ウォッチングでの汗は、俄虫温泉か「館町いこいの家」の湯につかって流してはどうだろう。

〒043-13 松山郡厚沢部町字富里

（松山営林署厚沢部担当区——厚沢部町緑町

☎ 01396-4-3021



## 北海道に舞い降りた迷鳥たち (4)

山田良造

人々の無関心が鳥を減すことを会報77号で述べたが、このことが現実の問題となった実例があった。

シギ類の重要な休憩地として知られる鶴川河口の干潟が、鶴川町で計画した生活排水路の工事で干潟が埋められ、道央最大のシギ類休息地を失ったことです。この干潟がシギたちの重要な休息地であることを鶴川町では知

らず工事をすすめた無関心さを残念に思う。鳥たちの生活環境を守ることは、地域の人々との理解と協力がなくしてあり得ないことを痛感した。

今回の迷鳥記録は紋別市大塚恭司・大館和広、札幌市羽田恭子・北尾諭（故人）氏、根室市加藤義則・それに私の記録を紹介します。（鳥名番号は前号から続く）

ゾウゲカモメ 1986. 12. 28 紋別港 大塚恭司

### 12. ゾウゲカモメ (カモメ科)

1986年12月28日夕方、流水接近間近な紋別市紋別港第2埠頭岸壁付近を、オオセグロカモメよりずっと小さく、全身はほぼ真白なカモメが飛んでいるのを、紋別市大山1-20大塚恭司氏が観察した。大塚氏の連絡で紋別市花園町3大館和広、大塚美智子氏の3人が観察し、迷鳥ゾウゲカモメと確認された。

ゾウゲカモメは常に単独行動をとり、ほとんど滑空なしで飛び、3 km 程離れた紋別市モベツ川河口との間を飛びまわり、河口の蓮葉氷の上で一度だけ休んだ。右足後指が脱落して、その部分に肉芽を形成していた。

翌日の12月29日まで観察された。

ゾウゲカモメは全長約44 cm。成鳥は全身が白くて、目は黒く、くちばしは黒く先は黄色い、足は黒色。



北極海の島々で繁殖し、冬はやや南下するものもある。日本にはまれな冬鳥として渡来する。1934年2月26日根室市納沙布岬、1981年3月千葉県銚子港、1989年12月13日と前記の2回紋別港では記録された。

### 13. コキアシシギ (シギ科)

1980年9月13日、札幌郡石狩町八幡町石狩川でしゅん濩工事が行なわれ、干潟状の排泥池にはカモメ・シギ類が集り、絶好の探鳥地となっていた。北海道野鳥愛護会会員羽田恭子、北尾諭氏（故人）はこのシギの中に、鮮やかな黄色の足をした印象的なシギのいるのに気がつき観察した。このシギは単独行動をとり、警戒心はなく動かずにいて3 m ぐらいまで近寄ってくる。採餌行動は車のワイパーのように横ふりをくり返している。飛翔時は腰が四角く白くて、アオアシシギやツルシギのパターンとは異なっていた。9月13日から20日までこの排泥池で観察された。この頃の日本の野鳥図鑑にはまだ掲載されていない種



コキアシシギ 1980. 9. 石狩八幡 小堀煌治

であるため、同定を日本鳥類保護連盟柳沢紀夫氏にお願いした。

コキアシシギは全長約24cm。体の上面は灰褐色で、白色の羽縁や黒褐色斑がある。下面は白色だが、顔から胸、わきにかけて灰褐色の縦斑がある。くちばしは黒色

#### 14、コモンシギ (シギ科)

1982年9月9日・勇払郡鶴川町鶴川河口付近牧草地で羽田恭子氏は50羽程のムナグロの群れの中に、コモンシギが1羽仲間入りしているのを観察した。このシギは草丈の低い牧場で盛んに採食し、ムナグロが飛び立つと一緒に飛び立って付近の牧草地に移動した。

羽田氏は2日後の9月11日、鶴川河口牧草地で、右足付け根付近を怪我しているコモンシギ1羽を観察した。地上では右足を引きずって採食していたが、飛ぶのには支障がないようだった。この日梅木賢俊氏等も観察し写真撮影した。

9月28日正午頃、私は、鶴川河口付近の牧場で、エリマキシギに似た3羽のシギを観察した。このシギは常に行動を共にし、馬糞や牛糞が散乱する牧草地で採食していた。エリマキシギにしては小さく頭が平たい、目のまわりが白いことからコモンシギと思い、逆光だったが、3羽一緒にアップ(距離25mぐらいから)で写真を撮った。後程日本鳥類保護連盟柳沢紀夫氏にお願いして、写真を見てもらいコモンシギである回答を得た。



キガシラシトド 1988. 4. 27 根室西浜 加藤義則

キガシラシトドは全長約16cm。幅が広い頭中央線は黄色、その両側は目の線まで黒く、ほお、のど、腹は灰色で、わきは褐色がかっている。背は褐色で黒い縦すじがある。翼は黒褐色で雨おおいの先端は白く2本の白線に見える。くちばしは橙黄色、足は淡褐色。

アラスカとカナダの西部で繁殖し、冬はアメリカ西部

で細長く、足は黄色で長い。

北アメリカ大陸北部で広く繁殖し、冬は南アメリカに渡る。日本にはまれな迷鳥で、1979年8月11日根室市春国袋と前記石狩の記録がある。



コモンシギ 1982. 9. 28 鶴川河口 山田良造

コモンシギは全長約20cm。体は全体が黄褐色で、下面はやや淡い。頭、背、翼の上面には黒褐斑があり、背は各羽縁が黄褐色のため、エリマキシギのようならご模様のはっきりと出る。細いくちばしは黒色で、目のまわりは白く、足は橙黄色。

アラスカ北部で繁殖し、冬は南アメリカに渡る。日本には迷鳥として1891年愛知、1957年大阪、1967年東京、千葉、1978年埼玉、茨城、静岡、1984年10月愛知県で記録された。

#### 15、キガシラシトド (ホオジロ科)

1988年4月27日午前7時頃、根室市西浜町3加藤義則氏は、自宅玄関わき櫻の下に、頭頂部が黄色のまだ見たこともない鳥がいるのを発見した。庭にバードテーブルを設置していたが、この場所とは離れた所で餌を捜していた。図鑑を出して調べるとキガシラシトドに似ていた。このことを野鳥仲間の根室市高田勝氏に連絡すると、日本野鳥の会常務理事塚本洋三氏、苫小牧市三浦二郎氏がいて一緒に来られ観察し、キガシラシトドと確認された。この鳥は27日以後は現われなかった。

に渡る。日本には迷鳥として渡来し、1936年12月10日東京都荒川と前記根室の記録と2例。

<参考文献> 日本産鳥類図鑑(東海大学出版会)、鳥630図鑑(日本鳥類保護連盟)、北海道野鳥だより41号(野鳥1982年11月)

〒003 札幌市白石区栄通16丁目4-13

# サハリンバードウォッチングの旅 (1)

柳 沢 信 雄

## <出 発>

なんとなくよその国の鳥を見たいなあ、と思いはじめた。そんなに遠いところでなく、ごく近い国、中国あたりが良いかな、九州（出水市）を往復しているツル達が広い草原で営巣している姿をゆっくり眺めながら、近くで日本にいない鳥達との出あいも楽しめたらこんな良い事はないのだが、そんな思いで中国への探鳥行を夢みて2年、仲間不足や中国内の情勢変化で当分は駄目だなと、がっかりしていた。

こんな時、鳥類保護連盟の柳沢紀夫氏からサハリンバードウォッチングの誘いを受けた。

## <ハバロフスク>

定刻、ソ連航空（アエロフロート）IL62（イリュージン）搭乗、ハバロフスクまでの1525 kmを飛ぶ。やがて眼下にシベリア大陸と蛇行するアムール河が見え着陸となる。

スローモーに税関検査を受けバスを待つ。スズメの声に目を動かすと、紀夫氏が「ちがうでしょう、イエスズメですよ」と教えてくれる。空港前広場ではスズメとイエスズメが混じって見られたが、はじめてイエスズメの実物を目にし、よその国へ来たんだなあ実感する。

やがてバスに乗り21時30分、ホテルイレッズリストへ。時差2時間、それにしても少々遅くなった夕食をホテルのレストランでとる。

窓すぐ横の円い建物上にカササギの姿を皆で見る。部屋に落ちついた後、紀夫氏の部屋へ挨拶に行く。暫らく振りのご一緒なので、国内の情報交換と今回ツアーのねらいどころをお聞きし、明日からのバードウォッチングに期待をかけ、午前1時部屋にもどり就寝。

7月4日（火）……5時半～6時半、千代子と2人ホテル周辺のアムール河畔を散策する。釣りや散歩、ジョギングから道端のおしゃべりと、それぞれが思い思いに生活している様子が感じられ、何十年前、日本でも普通に見られた人々の生き方が、まだ残る街として、懐かしい思いがする。

学生風の若者が笑顔で話しかけて来るが、こちら会話は全々駄目、話せないのが残念。

見知らぬ本州の鳥見屋と一緒にするのは多少気おくれするはするが、柳沢紀夫氏がアドバイザーなら少々の我儘も聞いてもらえそうだと家内共々参加することになった。

何せ、初めての外国旅行。すべての手続きを旅行社にまかせ、それでもあわただしくやっと新潟空港までこぎつけた。

空港では、結団式を終えた時刻、不安げに目配りする若いコンダクター京野氏と一瞬目線が合い言葉を交わす。混雑する出発ロビーへ案内され、同行者への自己紹介もそこそこに、日程説明・注意事項とを聞き、渡航書類を受け取りメンバーの仲間にくわわる。

ハバロフスク赤の広場にて  
ナターシャさんと柳沢夫人



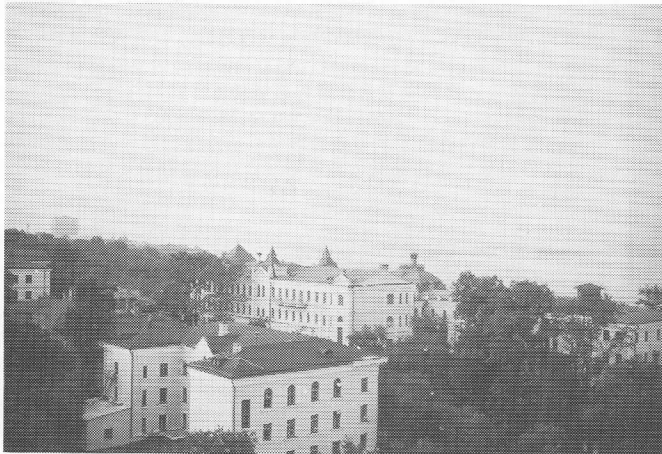
7時～8時15分。全員で朝のバードウォッチングにアムール河畔公園を歩く。この時間もう泳いでいる姿も見られる。街灯に群れて落ちたカゲロウが歩道を真白にし、スズメの若鳥達が夢中でこれをついばんでいる。アムール川を飛ぶユリカモメ。思いっきり枝を伸ばした公園の樹間ではハシブトガラ、シジユカラが見えかくれし、カササギの若鳥がやかましく餌をねだって親鳥につきまとう姿など、緑と鳥達と人々の動きが、こうもじっくり見えるのはどうしてなのかと不思議に思える朝だった。

10時～13時。ハバロフスク市内観光、ガイドは日本語の上手な女性（学生）だった。街で見かける子どもや若者は誰もが可愛いらしく、スタイルも抜群なのに、生活

が重なるにつれて、誰もが一樣に肥大さを増す女性群に只驚きである。誰かが、ソ連の女性は、いつ、どこから、なぜあのように発酵するのかなァと呟いた。全く同感だ。それにしても発酵とはびったりだな、うまい表現だと感心する。

観光案内は建物・広場・博物館・駅などおきまりのコースだが、我々はあまり上等な観光客ではない。どれにも感動が少なく、反応がいま一つ薄くて、ガイドもつい沈みがちとなってしまう。それが、駅舎にとまって餌をむさぼるチョウゲンボウを見つけた時と駅反対側のビル近くを群舞するアマツバメに出あった時だけは、全員の目の色が輝き、歓声があがり、暫らくはガイドの指示も耳に入らず、釘着けになっていた。ガイドはしばし呆然、何だろうこの日本人といった顔になっていた。最後はホテル近くの博物館で市内見学をしめくくる。

14時半～16時半。午後は遊覧船でアムール河から兩岸の風景を楽しむ。客は日本人とアメリカ人ばかりだった。



窓外の街並とアムール河

こんな大河にも生活の密着した生きた河が感じられた。人・ヒト・ひとで埋めつくされていた海水浴場、まばらに点在する家屋が見えると、そこでは必ず水辺に犬と数人の親子の泳ぐ姿、別荘地の川岸に三三五五水辺を楽しむ風景、青少年のキャンプ場と思われる所が幾つか見られたが、そこには必ず高い塔が立ちその上に箱のような物が見えた。

紀夫氏の話で、ソビエトの巣箱なのだと聞きびっくりする。私の頭にソビエトの巣箱は全くなかったが、古くからこのような活動があったとの事である。

ホテルで夕食をとり、いよいよサハリンへ向けての出発となるが、ここでハバロフスクの印象をまとめておこなう。

街並からは大都市の感じは受けなかった。静かな落ちつきのある地方の小都市と感じた。これは街の中に大き

な街路樹が多い事、車の台数が少ない事もあるが、ネオンや看板が極端に少なく、商店が住宅を圧迫する今の日本の街とは全く違っているせいかも知れない。

車道は中心部にとられた車優先で乱暴な程の走行だが、並木部分が広く、その中に道路の主役としての歩道がデーンとあり、歩行者がゆったりと往来している。誰かが、この道路の違いは、カゴや人力車と馬車のちがいではないかと話してくれたがうなずける気もする。

厳しい冬との関係があるのかどうかわからないが、電柱がすくなく、信号機も人々の目の高さくらい、唯一の看板をかかげている党の建物も道路から一歩さがって路上の見通しは花壇と並木、そこを歩く人々の姿より見えない。

観光客には不便だろうが、ここに住む人々の大地にしっかりと根ざった生活が感じられ、何とも頼もしい感じがし、旅行者もまた落着ける。

ともあれ、私たちは街の観光に来たのではない。一刻も早いバードウォッチングをのぞんでサハリンへとハバロフスク空港へ向う。再度の空港、今度こそイエズメを撮影しようと空港前広場でイエズメを追う。

ファインダーをのぞきながら追いかけ、やっとシャッターチャンスとなるが、何故かまわりが気になる。ひょいと頭をあげるとソビエト人達の目が一斉に集中しており、声を出したり、手まねで撮影禁止区域だと知らせてくれていたのだ。

そこは広場より少し横に入った露店商街、みすぼらしいだけで何も特別な物はないのだが、市民が揃って製止しているのだから、これ以上強行する訳にもいかず撮影を断念する。

コンダクターの話では撮影自由の筈なのだが、写真をとられたくないのは露天商の人達だったのかも知れない。ペレストロイカもまだまだなのかなあと、これからの野鳥撮影に一抹の不安を感じながらサハリンに向けて飛び立つ。

〒003 札幌市白石区栄通8丁目3-11



# チゴハヤブサの巣立ち

三 船 幸 子

5階ベランダで観察したチゴハヤブサの巣作り・育雛、巣立ちを紹介しましょう。

芽吹き早いカエデやエルムの樹が若草色にすっかり覆われた晴天の夕方、チゴハヤブサが鳴きながらヤチダモの樹に羽根を休めた。奇しくも昭和天皇誕生日だった。

都心に近いこの辺り、札幌中心街より5キロ圏内に位置し、琴似の農業試験場あと地ゆえ老樹が多い。5階建の公務員住宅が林立するなか、鉄路北側わが家の棟前に4本のヤチダモの大木が東西に並んで立っている。その樹に1987年初めてチゴハヤブサが営巣し、1羽の雛が誕生したのを観察していた。

88年やはり今年も渡ってきた。「ようこそ、ごくろうさま」と言いたい逸る心を抑えて双眼鏡をとりだす。するとチゴハヤブサは到着の挨拶に立ち寄ったといわぬばかり早々に手稲山の方向へ飛び去った。

翌日も夕方やってきて昨年営巣した樹の上空を旋回し、ひとこえ鳴くと山をめざし霧の中へ消えていった。以来数日、連れらしいのを伴い、ちらっと訪ずれば前回の巣にほど近い他のカラスの古巣へ近寄る。眺めては巣に入り点検をし嘴で盛んに古い枝を組み直す、その最中ちかくに止まっているカラスを追いはらっていた。

そうした一連の動作を連れは他の木に止まりじいっと見守り、終了すると共に帰っていく。

ようこそサッポロへ 1988年4月29日



姿を見せ始めて1週間。早くも求愛給餌が始った。♂がシジュウカラをくわえて巣に入り♀を呼び寄せ巣の中でプレゼントした。そのあともスズメを与えていた。終日巣の点検には怠りない。

巣はかなり深いらしく、縁に止り首をつっ込んで座わりを良くしている。

巣の縁で、また時にはテレビのアンテナ上での交尾をみかける。カラス追いに余念なく、夕方になるとどこかへ飛んでいく。10日間程そのような状態が続いた後♀が甘えを含んだチーヨという中延びのする声で鳴くようになり、二羽で巣の近くに止るが、だんだん♀の巣に入る回数が多くなってきた。

1ヶ月が経過し6月になると♀が度たび巣の中に留まり、中旬から長いこと巣に入るようになった。抱卵しはじめたらしく、♂と交代もする。

その頃ヤチダモの樹もすっかり葉を広げ5階のベランダからの観察がむずかしくなってきた。

抱きはじめて10日ほど経ると♀が巣の中で甘え鳴きをするようになった。これは空腹か、あるいは交代の催促にも聞きとれるのだが……交代で抱卵 6.18



競って親から餌をとる 7.25 9日目

7月17日良く晴れあがった早朝、親鳥は昂揚したかん高い鳴き声をあげて巣の樹の回りを飛びまわった。雛が誕生したらしく親はにわかにならなくなった。

さっそく餌の小鳥を運び巣の縁でちぎっていた。しかし雛の鳴き声も影も此処からは観察できない。

4日目の給餌時に雛の白いうぶ毛をちらつ観察できた。生後5日目に雛3羽を確認。

親は巣の縁へ止り獲物を挽き裂くだけで雛にそれを与えるのではなく、雛みずからが親の口からとる。ここに生まれながらにして猛禽特有の「捕らえる」という逞しさをみるおもしろい。生後10日もするとこのびあがって餌をとる。時にはスズメの片足らしいのを苦しうに時間をかけてまる呑みする。



食欲旺盛な雛たち 7.31 15日目

雛たちは、強い直射日光に3羽とも口をあけ日陰を求めて狭い巣の中を右往左往していた。

早くも羽根にグレーのまだら模様がみえはじめた。目の回りも黒ずんで、2週間目には尾も生えだし幼さが少しずつつきえていく。抱きはじめていらい夜は片親がかならず巣近くの樹上で見張りをしているらしい。

まどろみ、それからひたすら餌を待つ。今まで静かだった雛たちが給餌のたびに餌のとりあいでもキュルル、キュルルと変わった鳴き声を出すようになった。羽根が相当に伸び16日目頃から頻繁にはばたきをはじめ



猛禽らしさがうかがえる 8.3 18日目

る。誕生当初4～5回だった給餌回数も5～8回と増し親の苦勞がうかがわれる。餌も小鳥の他に蛙や昆虫類と多様になる。

うぶ毛が少しずつ抜けていく。羽替えのためか羽虫がいるのか盛んに嘴で体のあちこちをつつく。

この頃、足腰がしっかりしてきて時おり小枝を片足でつまみとったり、それを口にくわえたりもする。17日目から巣の縁にもすっきり立つようになった。

じいっと見詰める瞳に幼鳥ながら鋭さを感じさせる。



鳴いて餌を待つ 8.9 24日目

親は給餌に忙しく、ある時は1時間内に3回もスズメを捕って運んだことがある。その3度目には満腹したらしい雛がそっぽを向いていた。

排泄は親の手ならぬ嘴をわずらわせずとも自ら巣の縁へ行き尻を巢外へむけおもしろい糞を外へとばす。

雛たちは20日目まで体験した非情の雨にもめげず、陽が射すとすぐに羽ばたいていた。

雛はこの頃♀親の甘え鳴きにも似たピーヨ、ピーヨと鳴くようになり、うぶ毛も相当はえかわり巣の中で長時間つ立つようになった。雨の翌日、8月6日頃より親はトンボを捕って与えだす。

ひよっとすると最初に小さな秋をみつけるのは彼等たちかもしれない。

何はともあれトンボでは腹の足しにならぬとばかりに3羽揃って空腹を訴え頻繁に鳴く。



すっかり精悍な顔つきに 8.13 28日目



日ちゅう雛は枝を足でつかんだり、よく羽ばたいて鳴く。生後24～5日より餌をちぎって食べることを覚えた。しかし皮肉にも餌は日ごとにトンボが多くなってきた。

親はこれまで交代で主にスズメを捕り、木の枝やテレビのアンテナ上で、大ざっぱに羽根をむしり、いわば半調理のかたちで♀は巣に直接はこぶ。♂も運ぶがある時は♀を呼び寄せて樹の上で渡したり、たまには鳴きながら空中で足わしたもする。こんなとき、あまりにもみごとな枝にしばし魅了される。

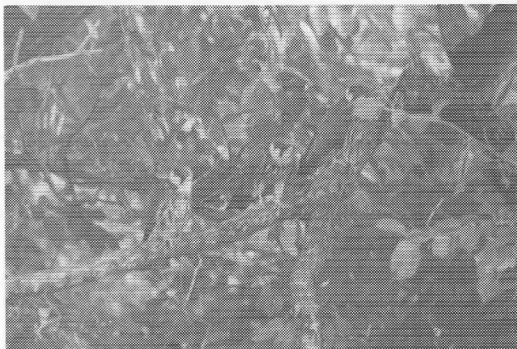


初めて巣を少し離れてみた 8.16 31日目

雛たちは狭い巣の中で落ちもせず連日はばたきを繰り返していたが、生後30日も経つと巣を這い出し近くの枝に止るようになった。

8月17日午後7時すぎ2羽の雛が飛び立ち10メートル離れたエルムの樹に止まった。生後32日目の巣立だった。残る1羽は1日遅れて巣を離れた。

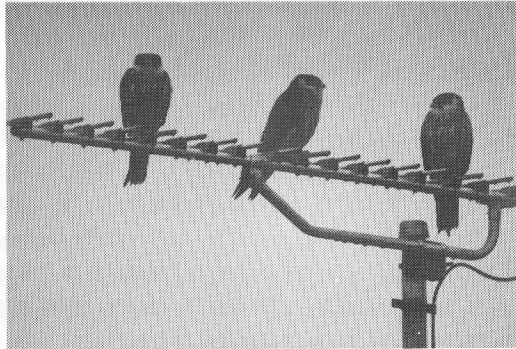
親は警戒しているのか巣立った雛を勇気づけているのか、ずいぶん高く鳴いていた。



エルムの樹にキョウダイが揃う 8.23 38日目

雛は巣立った翌日早くも上空をうまく飛びまわり、まもなくトンボを捕って食する。上空を飛びながら足でつかまえるのだが、最初の頃は捕るたびにガクンとバランスを崩し、とても餌の小鳥を狩るまではいかないらしく、鳴いて親につきまとい餌をねだっていた。

巣立つと親も雛も決して巣には戻らず近くの木に止って休む。6日目頃からは親のあとについてカラスを追ったり、親が捕ったスズメをもらって、それを木の枝に止り上手にちぎって食べる。時には1本の枝にキョウダイが揃うこともある。まだ頬から頬にかけてのあたりい面に淡いオレンジ色が残っているので遠目にも幼鳥であることが識別できる。



そろそろ渡らなくちゃ 9.12 58日目

生後40日位からファミリーで遠くまで出掛け夕方になると帰って来る。どうもこの頃より幼鳥たちの小鳥狩りがはじまるらしい。幼鳥があまり鳴かなくなった。久しぶりでアンテナにキョウダイが集合する。つばさがすっかり延びて猪首まで親にそっくり。

\* \* \*

9月26日前後に親は幼鳥を置いて渡って行ったらしく姿を見せなくなった。雛生後67日、巣立って35日前後のできごとだった。

幼鳥はそれから1週間経て10月3日には2羽が、生後74日、巣立って42日目で渡り、2日おいて残りの1羽も行ってしまった。

いつのまにかヤチダモの樹を見あげると、巣は小枝がつき出て乱れ、周りで無数の雪虫が舞っていた。

そのような訳で、二度あることは三度あるの諺にあやかるわけでもないが、次の春にも期待をかけてみたくなる。

89年、チゴハヤブサはやはり期待どりにやってきた。しかも前年より1日おくれて。……しかし、ハシボソカラスがすでに昨年のチゴハヤブサの巣跡を補修して雛を孵していたために、何度か訪れるが諦めて北西方向の発寒辺りで営巣したらしく、その後も度たび来ていた。やがて幼鳥を連れて訪れるようになったが、10月7日の幼鳥の鳴き声を最後にみあたらなくなった。

さて、90年は如何でしょうか。

幸運にも300コマのシーンを撮らせてもらえたことに感謝し、再来を願いつつ筆を置きます。

〒063 札幌市西区八軒1条西4丁目



## そっと参加 (野幌森林公園)

1. 10. 22 大槻日出

野幌森林公園の西側に隣接する丘陵に住みはじめてから6年になります。1985年の1月からバードテーブルに森林の小鳥がやってくるようになり、これが私と小鳥との交際のはじまりです。

1986年11月～1987年4月までのバードテーブルは、まるで、森林の小鳥がすべて集って来たような有様でエサをおくとすぐにカラ類があつまり手元からヒマワリの種をはこびはじめます。この年は、ヒマワリの種だけでも25kg。この他にリンゴやパンなど、我家の食事がさびしくなるほど小鳥がおとずれました。多種の小鳥が多数おとずれてくれることは、実に楽しいことです。しかし、一方では、森林はどうしたのだろうかと不安を感じる年でもありました。“Today birds. Tomorrow man”を考えさせられました。

1987年12月25日の朝、バードテーブルにエゾリスが2匹のりヒマワリの種をたべていました。感激です。さっそく、小さな個体に「リスト」、すこし大きな個体には「ショパン」と名をつけ、エゾリスとの交際ははじまりです。昨年は「ショパン」の訪問はなく、「リスト」が1匹だけ1月から3月 毎朝7時頃おとずれます。

さて今年の冬はどうでしょうか。森のオーケストラのメンバーと一緒にリストの登場を期待してるのですが、リスにとってのきびしい1年が心配です。

探鳥会には、ときどき そっと参加して自然を学び、満足しておりました。10月22日も、そっと参加。ノスリが天空を舞うのを観察し、マンゾクでした。昼食時に、この原稿用紙が、とどきました。これを機会に野鳥愛護会に入会させていただこうと思います。

野鳥を学ぶこと、野鳥から学ぶこと、自然保護して共に生きることを考えたいと思います。

<記録された鳥> トビ、ノスリ、カルガモ、スズガモ、コゲラ、アカゲラ、ヒヨドリ、ミソサザイ、ルリビタキ、ウグイス、キクイタダキ、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ヤマガラ、ゴジュウカラ、キバシリ、メジロ、カワラヒワ、シメ、イカル、カケス、ハシボソガラス、以上23種

<参加者> 宮田 久、大西典子、森田新一郎、川守田順吉、松本修子、佐藤 勇、霜村耕介、高橋 洋、山田良造、山下由美、志田博明・政子、武沢佐知子、渡辺万紀子、羽田恭子、新田キノ、佐々木武己、野口正男・キヨ、佐々木友子、戸津高保・以知子、田中金作・礼子、大野信明、鎌田玲子、菅原哲夫、柁川弘子、鹿内 勉、今野弘、高尾 満、柳沢信雄・千代子、水谷栄子・真理子、河野利恒、畠山俊雄、津田チヨ、井上公雄、その他計45名

〔担当幹事〕 柳沢千代子、井上公雄、

〒004 札幌市厚別区厚別東4条8丁目8-10

## ウトナイ湖探鳥会

1. 11. 12 栗林宏三

ウトナイ湖は曇りであったが風もなく暖かはずまずの天候であった。ウトナイレイクホテルの湖畔では、オオハクチョウ・コブハクチョウ・オナガガモが人々の与えるえさに、すぐ近くまで寄って来ていた。

大勢の人が集まりよいよ探鳥会の始まり。双眼鏡では湖面の鳥は良く見えないので、プロミナをのぞかせてもらうことにした。まずはチュウヒがわりと近い対岸の木で羽根を休めていた。オオハクチョウとヒシクイがえさをとっている集団の中に首に標識リングをつけているヒシクイをみつけた。プロミナでR-33と確認。

遠くの湖面にはヒドリガモ、マガモが気持ち良さそうに浮んでいる。又それよりずっと遠くではカワアイサの

一団が水の中に潜ったり浮いたりしてえさをとっている様子だ。警戒心の強い彼らはなかなか近くでは見られない鳥なので一度ゆっくり近距離で見たいと思う。

湖面の葦原にオオワシとオジロワシが翼を休めている。アオサギも少し離れた所で休んでいた。

オオワシの巨大で鮮かな黄色いくちばしは、いつ見ても壮観だ。各自ネチャーセンターに向かいながら自分の見たい鳥を探している。コウノトリを懸命に探している人もいるが、今日はいないようだ。

先日飛来したというニュースを聞いていたので期待していたが残念だ。水鳥達はエクリプスを終り美しい羽根に変わったもの、またエクリプスのおもかげを残している

もの、若鳥等が混ざり合い、判別がむずかしく図鑑を見ながらの探鳥です。湖岸にはヒシの実がたくさんうち上げられていた。草花に興味のある人は岸辺のやぶの中のコマユミの実等を見て歩いている。ネーチャーセンターの近くに着き中には入らず、枯草の上で昼食をとることにする。30分後、鳥合わせをして解散。

この探鳥会で感じたことは、岸辺で白鳥やカモにえさを与えていたが野生と人間のふれ合いには役立つが、お菓子等を与えることによって野生動物にも色々影響が出てくるのではないかと心配になりました。

<記録された鳥>カイツブリ、ミミカイツブリ、アオサギ、トビ、オジロワシ、オオワシ、チュウヒ、コブハクチョウ、オオハクチョウ、コハクチョウ、ヒシクイ、マガソ、ヒドリガモ、マガモ、カルガモ、オナガガモ、キンクロハジロ、スズガモ、ホオジロガモ、ミコアイサ、ウミアイサ、カワアイサ、アカゲラ、エナガ、ハシブトガラ、シジュウカラ、スズメ、ハシボソガラス 以上28種

<参加者>栗林宏三・修、沢部 勝、佐川節子、佐藤勇、澁谷信六・弘子、今野 弘、鎌田玲子、西田淑子、星 晴彦・より江・由花、羽田恭子・泉 勝統、田中金作・礼子、渡辺喜久雄・久美子・千鶴、難波茂雄、国本昌秀、浪田良三・典子、中尾、都、志田博明、柳沢信雄・千代子、豊口 肇・美代子、田中志司子、佐々木武己、津田千代、赤石誠二、大西典子、佐藤典子、高橋典彦、三浦美重子、桝川 保・弘子、戸津高保・以知子、野坂英三、河野利恒・千代子、鈴木克司、菅沼・菅沼、松本修子、遠藤 茂・幸子、三船喜克・幸子、小林春美、鉄井和枝、坂上、須藤裕子、森田新一郎・美智子、小林、千葉 広、竹内 強、真田靖幸、大野信明、斉藤恵美子、五十嵐俊子、安久津靖子、長田静江、井上公雄 以上70名

〔担当幹事〕渡辺紀久雄、大野信明

〒065 札幌市東区北17条東20丁目3-11-206

## 小樽港探鳥会

「自然と親しみたい」というだけで北海道に越して来てから半年余り過ぎました。まず最初にはじめたのが、バードウォッチング。運よく親切に教えてくださる方にめぐり合い、2回ほど野幌森林公園に連れて行ってもらいました。それまでは鳥のことと言えば、カラスやスズメぐらいしか知らず、こんなにもたくさんの鳥が身近にいるものかと驚きました。

さて、今回はじめて出た探鳥会は、小雪の舞う小樽で開催され、小樽支部の方々などたくさんの人たちが集まり、2台のバスで岬や埠頭を回りました。

はじめに行った祝津の岬では、風が強く、双眼鏡を持つ手が冷たかったが、カモメやウミウ、アビなどが見られました。海鳥がはじめての私にとっては、みんな同じに見え、指導員の方に聞いたり、フィールドガイドを見たりで、見分けするのが大変でした。特にカモメの見分けは最後まではっきりわからず、次の課題にしました。

次に行った埠頭では、シノリガモやホオジロガモ、コオリガモなどが見られました。かわいいしぐさや鮮かな色に、しばし寒さも忘れて見入ってしまいました。その時、埠頭の先の方で声があがり、走り寄って見てみると、目の前にヒメウがこちらを見ていました。すかさず双眼鏡で見ましたが、驚いたのか、すぐ海にもぐってしまいました。「ハヤブサだ！」

海に夢中だった私がふり返ると、もうシルエットしか

### 1. 12. 10 本橋孝之

見えず、「本当にハヤブサなの？」と思う場面もありました。

それにしてもさすがに探鳥会。鳥好きな人たちなんですね。昼食もそこそこにレンズを見入る姿は、本当に感心しました。が、これが本当の姿なのかも……

今回の探鳥会で聞いたかった鳴き声のひとつに、コオリガモがありました。人間の言葉と同じ「ア、アオナ」という鳴き声がどうしても聞きたくて、耳をすましてもなかなか聞こえてきませんでした。「だめか」とあきらめはじめたころ、雄が雌に近づいていき、やっと鳴き声を耳にすることができました。

バードウォッチングをはじめてまだ3ヶ月。鳥の姿を見つけるのにやっとなれて来た今では、しだいに鳥の魅力にとりつかれていくのがわかります。このまま行くと深みにはまりそうである。

<記録された鳥>アビ、オオハム、アカエリカイツブリ、ハジロカイツブリ、ウミウ、ヒメウ、トビ、ハヤブサ、コガモ、シノリガモ、コオリガモ、ホオジロガモ、ウミアイサ、ウミネコ、カモメ、セグロカモメ、オオセグロカモメ、シロカモメ、ユリカモメ、ミツユビカモメ、ワシカモメ、ケイマフリ、マダラウミスズメ、ウミスズメ、ハクセキレイ、シジュウカラ、スズメ、ハシボソガラス、ドバト 以上29種

〒006 札幌市手稲区富丘3条5丁目

<参加者>及川光子、大町欽子、岩村秀雄、羽田恭子、  
 斉藤、本橋孝之・了子、田中礼子、福岡研也、山田良造、  
 佐々木友子、清水朋子、柳沢千代子、鉄井和枝、鈴木良  
 二・あや子、河野利恒・千代子、高橋典彦、田中志司子、  
 小須田秀子、加藤、松本修子、西川喜久世、大野信明、  
 佐々木和枝、戸津高保・以知子、松本六郎・美智子、佐  
 藤 勇、野坂英三、三船幸子、竹内、強、澁谷弘子、中  
 尾 都、小林、梅木賢俊・允子、今野 弘、森岡弘光、  
 伊藤恭子・聖子、榊川弘子、香川 稔、新田キノ・巳亦、  
 五十嵐俊子、長谷川涼子、神田、後藤礼子、松山、三浦  
 美重子、井上公雄、氏名不詳5名、計59名 日本野鳥の  
 会小樽支部から17名、合計76名

〔担当幹事〕中野高明、渡辺俊夫、井上公雄



コオリガモ 小樽港

## 藤の沢新年探鳥会

### 2.1.21 小野有五

野幌森林公園の村野さんのお誘いで、初めて野鳥愛護  
 会の探鳥会に参加させていただいた。家の中から探鳥が  
 できると聞いて、ん？と半信半疑のまま午前10時に「小  
 鳥の村」の対岸にある白鳥園に伺う。ふだんはジンギス  
 カンの食堂になっている畳敷きの大広間は、すでに会員  
 であふれんばかり。庭に面した窓際に、ようやく座って  
 ガラス窓の外を見ると、手を伸ばせば届きそうな餌台に  
 は、これまたシジュウカラや、体の大きなカケスがあふ  
 れんばかり——。ふだんはスズメしか来ない餌台の世話  
 人なので、びっくりして興奮しているうちに、会は「小  
 鳥の村」名誉村長、小沢じっちゃまの86才とはとても思  
 えぬお元気なお話で始まり、当日のスペシャル・ゲスト  
 、どろ亀さんこと高橋延清さんの詩の朗読、それにお  
 二人の楽しい対談が続いて、あっという間にお昼。それ  
 ぞれ持参したおにぎりなどをほうばるうちに、小沢さん  
 の奥様が心をこめてつくって下さった豚汁が出、ビール

が出、残念ながら欠席された平井秀松さんからの差し入  
 れの日本酒が出て、会もたけなわとなった。餌台のほう  
 にも、それにあわせてか、アカゲラが来てくれたり、反  
 対側の窓ではイカルが姿を見せりして、そのたびに、花  
 (鳥)よりダンゴという感じの会員の眼がいっせいに窓  
 の外に向く。



どろ亀先生自作詩の朗読

食後はとても楽しくて難しい。「鳥さがしゲーム」や、  
 鳥の名前の漢字あてゲーム、鳥の英語名まで考えるゲー  
 ムなどが続いて、一同、頭の体操をしながら、いつか見  
 た鳥、ことしこそは見るぞと心に決めている鳥のあれこ  
 れに思いをはせながら、まだ名残りはつきないものの、  
 午後3時に散会した。

小沢さん、高橋さんのお話でいちばん心に残った言葉  
 は、「森や鳥たちが、こんなにも大きな喜びや生きる勇  
 気を私たちに与えてくれているのだから、私たちがなに  
 か森や鳥たちにお返しをしなければいけないのではない



小沢じっちゃまの熱弁

か」ということ。探鳥会に参加してただ楽しむだけでなく、ひとりひとりの力は小さくても、めいめい出来ることを、森や鳥たちのためにやっていきたい。——そんな思いをあらたにした。1990年代のスタートにふさわしい新年の探鳥会であった。

＜記録された鳥＞ツグミ、アカゲラ、ヒヨドリ、ハシブトガラ、シジュウガラ、イカル、シメ、スズメ、カケス、ハシボソガラス、以上10種

＜参加者＞ 山田一夫、清水勇夫、中尾 勇、野坂英三、柳沢信雄・千代子、竹内 強、清水朋子、綿谷千冬、西川喜久世、岩渕登起子、太丸リツ、山崎カツエ、森田新一郎、伊深弘子、高橋 洋、富田寿一、佐々木友子、佐々木和枝、新田キノ、佐藤幸一・和子、榊川弘子、田中礼子、吉岡孝夫、菅沼良三、鉄井和枝、安久津清子、永田しずえ、佐藤博吉、井上公雄、佐々木武己、田中朝雄・雅子、武沢和義・佐知子、戸津高保・以知子、難波茂雄、千葉 広、小堀煌治、巳亦ミヨ子、五十嵐俊子、斎藤喜美子、小林春美、加藤チツ、萩原俊男、志田博明・政子、犬飼 弘、泉 勝統、村野紀雄、小野有五、逸見康夫、



庭にきたシメ

黒川幸江、佐藤ケイ、菅沼郁子、富樫省三、鎌田玲子、大西典子、新妻 博・登貴子、沼田美代子、佐藤紀代子、富川 徹・優、桑原一夫、泉屋宣志・恵津子、大野信明、霜村耕一・佳代子・耕太、道川富美子、小沢広記、高橋延清 以上76名

＜担当幹事＞ 小堀煌治、道川富美子、竹内 強



【野幌森林公園】

平成2年5月6日(日)

鳥たちにとって1年中でもっとも忙しいシーズン(繁殖期)を迎えますが、我々バードウォッチャーには待ち待った憧れの季節到来です。日毎に鳥たちの囀りが林内いっばいに響きわたりますが、美しいコーラスと双眼鏡で受けるドラマチックな映像からは、他とは違った春の第一印象を与えられることでしょう。この季節は春の草花のみごろでもあり歩道沿いでは、エゾエンゴサク、フッキソウ、ナニワズ、シロバナノエンレイソウ、ユキザサなどの可憐な姿もみられ、探鳥会をより楽しいものしてくれます。

午前9時 大沢口駐車場入口集合  
【千歳川周辺一泊早朝探鳥会】

【千歳川周辺一泊早朝探鳥会】

唯一、宿泊を伴う探鳥会です。恵まれた自然環境条件のもとで早朝(翌日)に行われることから、記録される鳥種も大変多く、例年50種類程度が観察されています。中でも千歳川という河川環境を反映して、北海道でみられるブッポウソウ目のヤマセミ・アカショウビン、カワセミの3種が勢揃いで観察できることのほか、アオサギ、オンドリ、マガモ、キセキレイなどもお馴染みの仲間です。奥深い山中からはアオバズクやクマガエラの鳴声を聞くこともめずらしくはありません。

まず、初日は探鳥会の成功を祈りながら、ジンギスカン鍋を囲んでのささやかな交流会となります。

- (1) 日時：平成2年5月12日(土)午後7時より交流会  
13日午前4時より探鳥会開始、午前中解散予定
- (2) 場所：「サンポートガーデン」  
(千歳市蘭越町5番地 ☎01232-3-3741)
- (3) 会費：2,000円程度(夕食付きジンギスカン鍋)
- (4) 交通：自家用車の方はサンポートガーデンまで直接越し下さい。また、列車・バスの方は午後6時30分までにJR千歳駅待合室に集合し、タクシーで現地まで向かうことになります。
- (5) 申込：4月と5月の野幌森林公園探鳥会の折りに申し受けます。電話の場合は5月11日までに011-551-6321井上宅まで

※参加に際し各自で以下のものをご用意します。

- ① 寝袋もしくは毛布等(畳部屋ですが布団等はありません)
- ② 翌日の朝食

【平和の滝 夜の探鳥会】 平成2年6月23日(土)

この時季は、北海道に渡ってくる夏鳥が一応定着していますが、中でも夜行性であるコノハズクなどは比較的遅くなってからでないと観察(確認)できない鳥のひとつといえます。鳴声が「ブッパン、ブッパン」と響きわたる特徴的な声から山の霊鳥「仏法僧」として知られています。昨年はこのコノハズクをはじめ、ヤマシギ、ヨタカ、ハリオアマツバメ、トラツグミなど、合計18種が観察記録されています。さて今年は!

午後6時30分 平和の滝駐車場集合

市営バス西野平和線平和の滝下車 徒歩20分  
※夜間の危険に際し懐中電灯の持参が有用ですが、使用にあたってはリーダーの指示をおおぎましましょう。

〔植 苗〕 平成2年6月10日(日)

美々川がウトナイ湖にそそぐ辺りです。湿原と草原の魅力を一気に満喫できるのがこのメリットなのです。カッコウヤツツドリの鳴声と飛翔を確認するや、水上ではコブハクチョウ、マガモ、カルガモなどの採餌行動もよく目にします。時折、子供(ヒナ)を連れて優雅に散歩する場面に出会えると、それは愛らしい気持ちに浸されることでしょう。とにかく北海道特産種のシマアオジをはじめ、ノゴマ、ノビタキ、コヨシキリ、オオジュリンなど、草原性の鳥たちを存分に堪能できる魅力いっぱいの探鳥会です。

午前9時10分 JR植苗駅前集合

〔東米里〕 平成2年6月17日(日)

都市開発の波が押し寄せ、ここも年々自然環境(草原)が少なくなっているようですが、それでも多くの鳥たちが確認されています。コウライキジ、イソシギ、オオジシギ、カッコウ、ヒバリ、アカモズ、モズ、オオヨシキリ、シマアオジ、オオジュリンなど。都市近郊で草原性

の鳥たちを観察できる貴重な場の体験を通して、自然のあり方をあらためて考えてみたくなる探鳥会です。

午前8時30分 東米里小学校前集合

市営バス米里線 東米里小学校前下車

〔福 移〕 平成2年7月1日(日)

この特徴は都市に近い中で、唯一(探鳥会開催地の中で)ウズラが観察できる場所です。またアオサギ、コチドリ、イソシギ、カッコウ、ショウドウツバメ、エゾセンニュウ、シマセンニュウ、ホオアカ、オオジュリン、オオヨシキリ、ベニシマコなどは常連の鳥たちでしょう。ここは2~3年前に河畔林の伐採や敷地改変など、自然環境への大きなインパクトもありましたが、周辺の河川環境が多少なりにも維持されていることで、十分とはいえないまでもウォッチングが楽しめる場所です。

午前8時40分 市営バス札苗線福移停車場集合

〔野幌森林公園を歩きましょう〕

平成2年5月20日(日)、6月3日(日)、7月8日(日)、

午前9時 大沢駐車場入口集合

※いずれの探鳥会も余程の悪天候でない限り行きます。

昼食・筆記用具・観察用具・雨具等をご用意下さい。

探鳥会の問い合わせは 011-551-6321井上宅まで。



#### ◆総会のご案内

平成2年度の総会を次のとおり開催いたしますので御参加ください。

日 時：平成2年4月14日(土)  
午後2時

場 所：札幌市婦人文化センター(中央区大通西19丁目)

課 題：平成元年度事業報告

平成2年度事業計画 ほか

#### ◆野鳥写真展のご案内

今年も野鳥写真展を次のとおり開催しますので、どうぞご覧下さい。

また、写真の募集も行っています。たくさんの応募をお願いします。

#### 1 写真展の開催

・たぐぎん本店地下キャッシュサービスコーナー  
(札幌市中央区大通西3丁目)

5月8日(火)から5月17日(木)まで

・三菱信託銀行札幌支店ロビー  
(札幌市中央区北4条西4丁目)

5月18日(水)から5月31日(木)まで

#### 2 写真の募集

・締切日：4月15日(土)

・送付先：〒064 札幌市中央区南6条西11丁目  
共済ハウス内 井上公雄あて

電話 011-551-6321

・大きさは四ツ切りとし、カラー・白黒は問いません。

・写真には、鳥の種名・撮影年月日・撮影場所・撮影者指名をつけてください。

#### 〔編集後記〕

あつという間のこの1年。いたらぬことばかりで深く

お詫びします。この間、多くの方々からの寄稿や助言を戴き厚くお礼申し上げます。(新米の編集者…泉・鎌田)

〔北海道野鳥愛護会〕年会費 1,500円(会計年度4月より) 郵便振替 小樽 1-18287  
☎060 札幌市中央区北3条西11丁目 加森ビル5・6階 北海道自然保護協会気付 ☎(011) 251-5465